

令和 5 年 6 月 11 日現在

機関番号：32670

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02293

研究課題名（和文）長唄の旋律形成に関する学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary research on melody formation in nagauta

研究代表者

配川 美加（HAIKAWA, Mika）

日本女子大学・文学部・研究員

研究者番号：10787344

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：長唄の伝承については、長唄の譜を所収する文政期に成立した一節切譜の解読により、当時の旋律と現行の伝承には大きな違いがないことが明らかとなった。

長唄のうち、クルイ合方の旋律には、能の囃子 獅子 のうち、従来言われていた部分とは異なる箇所が摂取されたことが推定された。能の大ノリ謡を摂取した長唄には、当時の古い近古式地拍子が残っていることが具体例で示された。長唄は能の中世的な発音を取り入れていないことも明らかとなった。アクセントの反映については、上方の影響を受けた長唄には三味線の旋律に京阪式アクセントの反映が見られるが、唄の旋律は時代と共に徐々に東京アクセントに変わったことが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

長唄は曲の成立時の音楽を知る手がかりが極めて少ない。江戸期の長唄には具体的な音高を示す楽譜がなく、伝承に関しては懐疑的な見解も見られるが、一節切という異なる種目の楽譜を解読することによって、長唄の伝承の確かさを確認することができた。また、音声学の研究者、音楽学のうち能楽の研究者、長唄の研究者、長唄の演奏家という異なる分野や立場の人間が協力することによって、旋律形成の状況が明らかになることを本研究で示すことができた。

研究成果の概要（英文）：With regard to the tradition of Nagauta, it has become clear that there is no major difference between the melody of that time and the current tradition by deciphering the score of Hitoyogiri that was completed in the Bunsei period, which contains the score of nagauta. It is presumed that the melody of Kurui Aikata, one of the Nagauta songs, incorporates a different part of the Noh accompaniment Shishi from the part that has been said in the past. Nagauta, which incorporates Noh nori chanting, showed concrete examples of the old Kinko-style rhythm of the time. It also became clear that Nagauta did not incorporate the medieval pronunciation of Noh. Regarding the reflection of the accent, it was shown that the shamisen melody of Nagauta, which was influenced by Kamigata, reflects the Keihan-style accent, but the melody of the song gradually changed to the Tokyo accent over time.

研究分野：音楽学

キーワード：長唄 能楽 旋律 アクセント 音声 伝承 一節切 歌舞伎

1. 研究開始当初の背景

近世に歌舞伎の音楽として成立し、主に江戸で発展した長唄は、他の種目の影響も受けて旋律などの音楽を形成してきた。他の種目には、能楽(謡・囃子)・地歌・箏曲・説経節・各種浄瑠璃(義太夫節・一中節・半太夫節・河東節・外記節・大薩摩節・常磐津節・清元節・新内節・宮園節)・琵琶楽・民謡・流行唄などが挙げられる。こうしたことは長唄だけに限らないが、長唄は固有の旋律が明確でない分、その程度が目立つと考えられる。

このうち、地歌・箏曲・説経節・各種浄瑠璃との比較は古くから行われ、町田佳馨は『江戸時代音楽通解』(大正9年、古曲保存会)や、昭和30年11月~31年10月にかけて発表した「三味線声曲における旋律型の研究」(昭和57年『東洋音楽研究』47号・第2分冊に学芸校訂本所収)などで五線譜も使い具体的に行っている。研究代表者である音楽学の配川美加も、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターにおける研究会で、平成24年1月29日に「長唄における一中節・河東節の旋律型」として長唄と一中節・河東節の比較を、平成28年1月23日に「長唄における説経節」として長唄と説経節の比較を行った。そのうち河東節との比較の結果は平成27年、「長唄における半太夫節・河東節の音楽的影響 学芸校訂本を基に」(『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告9』)で発表した。

一方、中世に始まった能楽の影響は著しい。しかし、長唄と能楽の本格的な比較研究はほとんど行われず、詞章の比較はされても、何流の謡本に基づくのかまでは特定できていなかった。音楽面での比較研究は蒲生郷昭氏が道成寺物・獅子物・三番叟物などについて詳しく行い、その成果は同氏の『日本古典音楽探求』(平成12年、出版芸術社)などに所収されているが、音楽構造の比較が中心で、旋律の比較までは行われていなかった。

そうした状況の中、平成27年12月18日、東京文化財研究所無形文化遺産部第10回公開学術講座において「邦楽の旋律とアクセント 中世から近世へ」というテーマが取り上げられ、研究分担者で音楽学の高桑いづみが「明治以前の謡とアクセント」、研究分担者で音声学の坂本清恵が「近世邦楽のアクセント」について発表。坂本は長唄《鶴亀》を取り上げて、旋律部分に謡本の胡麻章に残る京阪式のアクセントの反映が見られ、その後、東京アクセントに変化したとする研究成果を発表した。声楽曲の多い日本音楽にとって、アクセントは旋律形成に関わる重要な要素と考えられ、アクセントと日本音楽の関りについては、金田一春彦が「邦楽の旋律と歌詞のアクセント」(田辺尚雄還暦記念論集『東亜音楽論叢』昭和18年、山一書店)などの中で述べている。しかし、前記の公開講座では、坂本がその論に誤りのあることも指摘した。坂本は義太夫節など浄瑠璃のアクセントを対象にこれまで研究を続けてきたが、前記の公開講座で初めて長唄の研究に取り組み成果を挙げた。

2. 研究の目的

能楽の謡・囃子との比較研究、及び、江戸時代から明治にかけてのアクセントなどに着目して、長唄の旋律形成の諸相を解明する。

3. 研究の方法

長唄の現行曲《傾城道成寺》《相生獅子》《英執着獅子》《鷺娘》《隈取安宅松》《越後獅子》《石橋》《勸進帳》などを取り上げ、まず、曲ごとに長唄の正本・楽譜・音源を集め、音源は五線譜に採譜して比較譜を作った。また、文政期(1818~1830)に出版された一節切(小型尺八)の譜『糸竹古今集』と『糸竹五色貝』に長唄が併せて約20曲所収され、リズムは不明だが、三味線の音高を知ることができるため、《傾城道成寺》《相生獅子》《鷺娘》《汐汲》については解読譜を五線譜にして、文政期の長唄の資料とした。その結果、一節切譜と現行の伝承では、旋律に大きな違いはなく、伝承の確かさが明らかとなり、現行曲を研究対象とする意義も明確になった。なお、『糸竹五色貝』は、昭和59年度の東洋音楽学会大会で野本まり子氏(当時、大阪教育大学大学院生)が研究成果を発表したが、その後、長唄研究で取り上げられることはなかった資料である。

次に、作曲当時の能楽(謡・囃子)と長唄を音楽面で比較した。また、唄と三味線の部分に歌詞のアクセントや能楽の発音がどのように反映されているかを調べ、変化も確認した。それらの結果を考察し、能楽の音楽、歌詞のアクセントなどが作曲当時の長唄にどのように反映され、その後どのように変化したのかを明らかにした。

4. 研究成果

本研究に先立ち、平成28年度は同じメンバーで、野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学術的研究拠点」の一環として助成金を得て、長唄《京鹿子娘道成寺》を取り上げ、共同研究を開始した。その結果、《京鹿子娘道成寺》のうち、能の詞章を取り入れた「中啓の舞」と「鐘入り」の部分には、本曲が作曲された頃に近い享保期の謡の京阪式アクセントが強く残り、「鐘入り」には唄も三味線も上方のアクセントが残っているが、「中啓の舞」では上方の影響が少なく、吉住小三郎系の唄に東京のアクセントが強く出ていることが確認された。また、唄が東京式アクセントを反映する傾向は、大正8年から大正13年の間にも強くなっていることがわかった。さらに、宝暦2年に上方で作曲されたとも考えられる「手踊り」「毬唄」では三味線部分に上方アクセントが強く認められた。以上については、坂本と配川が論文にまとめ、『日本女子大学紀要 文学部』第67号に発表した。

平成 29 年度は獅子物を取り上げ、能楽の影響を受けた《相生獅子》などの獅子物に共通する「クスイ」合方において、能楽の囃子「獅子」の能管の旋律のうち、「干の手」は旋律に反映されていないと言われてきたが、実際には「干の手」が反映されたことを高桑が明らかにし、その歴史的背景についての考察も併せて論文を『楽劇学』第 26 号に発表した。

一方、能楽の影響を受けない《越後獅子》などの獅子物に共通する旋律は、成立年代の古い河東節《神楽獅子》で太神楽の獅子舞を表す「神楽の合の手」が元になったことが推測され、その旋律は獅子物では「角兵衛獅子」の旋律にも用いられたが、獅子物に限らず、歳旦物や、神楽・神・祭の表現、さらに神を売り物にする物乞の表現にまで広がったことが確認できた。以上については、配川が論文にまとめて『長唄の伝承』(令和 5 年、檜書店)に掲載した。

平成 30 年度も獅子物を取り上げ、上方出身の初代中村富十郎が江戸で初演した《英執着獅子》の三味線の旋律には、京阪式のアクセントの反映を見ることができた。また、唄の旋律は時代とともに東京アクセントに変化したことも確認した。一方、江戸で初演された《越後獅子》の三味線の旋律には東京アクセントを反映するものがあるが、多くの音源を比べると、唄に京阪式アクセントの反映と考えられるものもあり、金田一のいうアクセントに拘泥しない唄い方も確認できた。以上の研究成果を坂本と配川が論文にまとめ、『日本女子大学紀要 文学部』第 69 号に発表した。

令和元年度・2 年度は長唄《隈取安宅松》《勤進帳》を取り上げ、能 安宅 の影響を探った。特に、謡の特徴的な発音を長唄がどのように摂取したのかについて、坂本が能 石橋、長唄《石橋》、長唄《京鹿子娘道成寺》、義太夫節《勤進帳》も加えて考察し、謡が独自に伝承してきた音声的なもの(鼻的破裂音など舌内入声音に母音を添加しない唄い方、それに伴う促音系連声など)を摂取することはないと結論づけた。義太夫節では、登場人物の位相を示す要素として、促音系連声を使用するので、長唄は、舌内入声音に母音を添加した近世の日常の発音と変わらない発音で唄うことにより、音曲としての独自性を生み出したと考え、以上を坂本が論文にまとめて前掲『長唄の伝承』に掲載した。

令和 3 年度は、高桑が『糸竹古今集』『糸竹五色貝』を調査して書誌の結果をまとめ、『糸竹五色貝』のうち《傾城道成寺》《相生獅子》の解読譜をもとに、当時の能楽の大ノリ謡がどのように現行の長唄に反映されているかを調べて論文にまとめた。また、《鷺娘》の解読譜をもとに、配川が文政期以降の伝承の確かさを確認。坂本は、《鷺娘》が古い江戸アクセントで作曲されたことを明らかにした。さらに、研究分担者で音楽学の星野は《相生獅子》における伝承の確かさを確認し、各自論文にまとめて『長唄の伝承』に掲載した。

令和 4 年度は、以上の研究成果を『長唄の伝承』にまとめ、その中には上記の他、本研究に必要な楽譜のうち、実態が不明だった桜井譜についての調査報告を星野がまとめて掲載。また、長唄三味線の人間国宝、今藤政太郎師に、長唄の伝承に関して話を伺い、「今藤政太郎師聞書」として掲載した。

なお、平成 28 年度、29 年度、30 年度、令和 2 年度、令和 3 年度は、それぞれの研究成果を日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画のシンポジウムで、星野を中心とする長唄などの実演を交えて発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 坂本清恵	4. 巻 100(3)
2. 論文標題 謡と定家仮名遣い	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 58-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本清恵	4. 巻
2. 論文標題 長唄《鶯娘》の旋律にみるアクセントー節切譜と三味線譜からー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『論集』	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 星野厚子	4. 巻 第15号
2. 論文標題 〔資料紹介〕東京文化財研究所所蔵 フランス・パテ社製SPレコードー長唄『寒行雪ノ姿見』『筑摩川』 を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 無形文化遺産研究報告	6. 最初と最後の頁 1 ~ 13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本清恵	4. 巻
2. 論文標題 長唄正本の胡麻章	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 論集（アクセント史資料研究会）	6. 最初と最後の頁 1 ~ 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高桑いづみ	4. 巻 26
2. 論文標題 長唄「クルイ」考序説	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 楽劇学	6. 最初と最後の頁 1～20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本清恵・配川美加・高桑いづみ・星野厚子	4. 巻 69
2. 論文標題 アクセントからみた長唄《英執着獅子》と《越後獅子》	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本女子大学紀要 文学部	6. 最初と最後の頁 25～39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野川美穂子・配川美加・吉野雪子	4. 巻 16
2. 論文標題 近世邦楽における「レンボ」の広がり	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本伝統音楽研究	6. 最初と最後の頁 1～42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本清恵	4. 巻 15
2. 論文標題 室町末期謡本の胡麻章	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 論集	6. 最初と最後の頁 1～14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本清恵	4. 巻 61
2. 論文標題 近松作浄瑠璃に仕組まれた音韻表現：動詞の活用と音便（特集 近松（下）上演編）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 歌舞伎：研究と批評	6. 最初と最後の頁 43 - 56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂本清恵	4. 巻 14
2. 論文標題 アクセント史料としての定家仮名遣い 「第七種の文献、文字の使い分け」の検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『論集』 アクセント史資料研究会	6. 最初と最後の頁 39-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 配川美加・坂本清恵	4. 巻 第67号
2. 論文標題 長唄《京鹿子娘道成寺》に摂取された謡 旋律とアクセント	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本女子大学紀要 文学部	6. 最初と最後の頁 49 64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 配川美加	4. 巻 第24号
2. 論文標題 近世邦楽における獅子 長唄を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 楽劇学	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高桑いづみ
2. 発表標題 長唄クルイ再考
3. 学会等名 楽劇学会第26回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 配川美加
2. 発表標題 近世邦楽における獅子 長唄を中心に
3. 学会等名 楽劇学会第25回大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂本清恵・高桑いづみ・配川美加・星野厚子
2. 発表標題 長唄における獅子物 ー二つの系譜ー
3. 学会等名 日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 坂本清恵・高桑いづみ・配川美加・星野厚子
2. 発表標題 長唄における獅子物 その二 ー《英執着獅子》と《越後獅子》ー
3. 学会等名 日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂本清恵・高桑いづみ・配川美加・星野厚子
2. 発表標題 能 安宅 と長唄《隈取安宅松》《勸進帳》
3. 学会等名 日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画（オンライン配信）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 坂本清恵・高桑いづみ・配川美加・星野厚子
2. 発表標題 一節切譜の復元からみた長唄の旋律
3. 学会等名 日本女子大学文学部・文学研究科学術交流企画
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 坂本清恵編、高桑いづみ、配川美加、星野厚子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 檜書店	5. 総ページ数 435
3. 書名 長唄の伝承 旋律形成に関する学際的研究	

1. 著者名 上野左絵・坂本清恵	4. 発行年 2023年
2. 出版社 義太夫節正本刊行会言語研究班	5. 総ページ数 369
3. 書名 『丹州爺打栗』自立語索引	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	高桑 いづみ (TAKAKUWA Izumi) (60249919)	日本女子大学・文学部・研究員 (32670)	
研究分担者	坂本 清恵 (SAKAMOTO Kiyoe) (50169588)	日本女子大学・文学部・教授 (32670)	
研究分担者	星野 厚子 (HOSHINO Atsuko) (90727182)	東京大学・文書館・学術専門職員 (12601)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関